

第74次印旛教育研究集会 安全教育分科会

研究主題

全ての職員が連携して迅速に対応できる学校安全の取組
～『学校安全の手引』に沿った『見える化』の構築～
(キーワード)連携、迅速に対応、学校安全の手引、見える化



とみさとしりつとみさとみなみしょうがっこう
富里市立富里南小学校 0476-93-1015

じてんしゃ ほんこうしゃ
自転車、歩行者とぶつかってしまったら…

○富里南小の児童とぶつかってしまったら

・近くの入や店にお願いして、学校にすぐに連絡する。
電話:0476-93-1015(富里南小学校)

○富里南小の児童以外の人とぶつかってしまったら

・相手の父や近くの入、近くの店にお願いして、警察に電話してもらう。
電話:0476-27-0110(成田警察署)

警 署 警 署

車とぶつかってしまったらドライバーさんに見せよう

○ドライバーの方へ

お手数ですが下記へご連絡をお願いします。

成田警察署 0476-27-0110

とみさとしりつとみさとみなみしょうがっこう
富里市立富里南小学校 0476-93-1015

※事故の概要などのご説明をお願いいたします。

警 署 警 署

令和6年8月20日(火)
第二部会 安全研究部
富里市立富里南小学校
徳山 敬明
石井 百香

1 研究主題

全ての職員が連携して迅速に対応できる学校安全の取組
～『学校安全の手引』に沿った『見える化』の構築～
(キーワード)連携、迅速に対応、学校安全の手引、見える化

2 研究主題の設定理由

学校で起こるトラブルは多岐にわたる。どのトラブルも迅速に対応・解決できなくては子供たちが安全・安心な学校生活を送ることができない。トラブルが起こった際にどれだけの確な対応を迅速に行えるかが重要になってくる。管理職や対応している一部の職員だけでなく、全職員がトラブルの内容と対応の状況等の情報を共有し協力体制がつけられるかが重要になってくる。そのためには、全ての情報が一目でわかるようになっていなければならない。『見える化』を図ることで、情報が全職員で共有でき、誤った対応や対応の遅れ、思い込みでの行動を防ぐことができるようになると考える。

これらのことから、研究主題「全ての職員が連携して迅速に対応できる学校安全の取組」～『学校安全の手引』に沿った『見える化』の構築～を設定した。

3 研究仮説

学校における事故や災害に関するものを『学校安全の手引』に沿って『見える化』を進めることで、迅速かつ確な対応ができ、教職員の連携も図れるであろう。

事故や災害が発生した際に、全職員一人一人が的確に判断し対応ができることが理想ではあるが、事故や災害は多岐にわたり、それらすべてに対して熟知することは非常に難しいといえる。であるから危機管理マニュアルが必要となってくるわけだが、それが形は整っていても事案発生時に確実に活用できるものでなければならない。そこで、この危機管理マニュアルを学校安全の手引に沿って見える化することで真に活用できるものとする必要があると考えた。

それ以外にも避難訓練や、登下校の交通事故防止や対応についても見える化を進めることで、教職員および全児童が的確な対応を迅速に行え、このことが連携にもつながると考えた。

4 研究の内容

(1)危機管理マニュアルの見直し「**危機管理マニュアルの見える化**」

及び、マニュアル作成時の職員へのフィードバックの方法

(2)事故・災害発生時の対応「**対応の見える化及び情報の共有と迅速な対応**」

(3)避難訓練での実証確認「**避難訓練での見える化**」

(4)登下校について(自転車通学)「**安全な自転車通学の見える化**」

①時差下校の導入「**安全な下校の見える化**」

②事故の際に使う「**お願いカード**」「**事故対応の見える化**」

③自転車点検「安全な自転車の見える化」

5 研究の実際

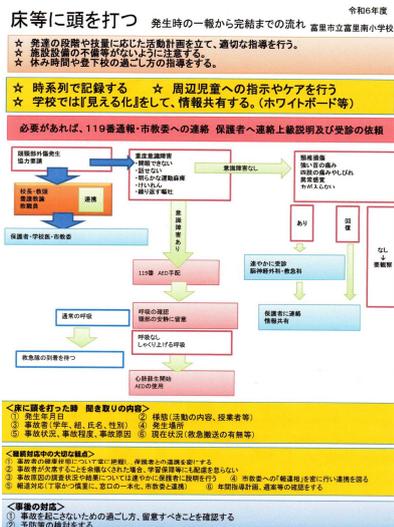
(1)危機管理マニュアルの見直し「危機管理マニュアルの見える化」

他校同様、毎年危機管理マニュアルの見直し、改善は行っていたが、以前の危機管理マニュアルは、ファイルに綴じられた印刷物であったため、実際に事故等が発生したときに手元に置いての活用には向かなかった。そのために、『学校安全の手引』及び北総教育事務所指導室危機管理担当から示された危機管理マニュアルを参考にさせていただき、一目でわかる危機管理マニュアルを作成し、マニュアルの『見える化』を行った。

このマニュアルの作成は、「危機管理マニュアル作成時の、職員へのフィードバックの方法」の一つとして若年層研修の一部を活用して行った。

対応や処置、連携や報告・連絡などの基本的内容はどの事案においても同様のことが多いため、経験の少ない若年層の教員が、マニュアルの作成に関わることで、事故・災害等が発生したときの基本的対応やその流れ、また個々の事案における違いがはっきりと見えてくることを狙った。

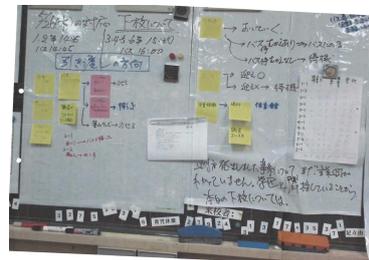
個々の事案の対応を1枚のシートにまとめた。マニュアルを作成し、ラミネートしてカードの形にした。カードはカードリングでまとめ、学級の全面黒板の下に設置して、必要なときに必要なカードがすぐに確認できるようにした。



各学級の危機管理マニュアル

(2)事故・災害発生時の対応「対応の見える化及び情報の共有と迅速な対応」

事故や災害等が発生した場合、職員室の予定黒板にホワイトシートを貼り付け、事案に対する対応等を時系列で記録に残している。このことが事案に対し今誰がどのような対応をとっているかや、対応の進み具合がわかり、対応の漏れ落ちをなくすることができる。職員はこれを見ることで現状を把握することができる。そこから自分のできることを考え協力体制を確かなものにできている。



事故対応記録用ホワイトシート

(3)避難訓練での実証確認「避難訓練での見える化」

本校の避難訓練の2次避難で大切に考えたことは、グラウンドへの避難から人数確、報告をどれだけ短時間で出来るようにするかである。このことが児童の命を守るとにつながるため、見える化を考えた。

①避難の時間短縮「避難・整列の見える化」

避難・整列の時間短縮のため、「整列は早く到着した順」学年・学級の位置は決めず、一番早く避難してきた学級が中心となり、その後左右に列を作る。ここでの最大のルールは、他の学級の列と交差しない。避難の邪魔をしたり、列が通り過ぎるのを待ったりしないことである。これは、災害の種類によって避難経路が変わる可能性があり、全校集会のような決まった順番で並ぶためには他学級の列とぶつかってしまい迅速な避難ができない。そこで「早く到着した順」で並ぶことにした。このルールを児童も理解しているので無理矢理前の学級について行こうとしたり、慌てて走り出したりすることはなくなった。

何らかの理由で学年順や同学年の学級が隣に並ぶ必要があるのであれば、避難完了後に並び直せばよいだけのことである。

②人数確認の時間短縮である。「人数報告の見える化」

迅速な報告ができるように「人数報告用テンプレート」を作成して見えるかを図った。

それまでの報告は、避難訓練計画の文書には報告の順番などが記載されていたが、やはり、教頭へ報告する際に順番が違ったり、報告に使う言葉が違ったり等々で確認に時間がかかることがあった。そこで、これを統一することで迅速に人数報告ができ、時間を短縮できるようにしたものである。

「人数チェックシート」(全学級の数一覧表)を教頭が持ち、担任は「人数報告用テンプレート」に沿って報告をする。当初テンプレート作成に当たっては、特別支援学級の児童が多くの時間、交流で学級にいる本校の実態を踏まえ、避難してきた児童数が在籍児童と支援学級児童の合計になるため、在籍児童数、学級児童数、支援学級児童数、欠席児童数と細かく報告する必要があると考え作成した。

実際避難訓練を繰り返すうち、反省から

- ・在籍人数と学級児童数とあると、逆にわかりづらい、混乱する。
 - ・支援学級も児童によって交流の教科が違い、その時々でいる人数が変化するため、学級の報告の時に支援学級の児童数を含めて報告することはあまり意味がない。
 - ・早く支援学級に戻し、人数確認をした方が正確な数がわかる。
- 等の意見により新たにテンプレートを作り直した。

学級には探検バッグの中に名簿と学級表示札及び人数確認テンプレートをヘルメットと一緒に持ち出せるようにしているが、体育や休み時間などに避難する可能性も考え、職員室の外と外体育倉庫内にも全学級の学級表示札と人数確認テンプレートを置き、教室以外からの避難にも対応できるようにした。

人数報告テンプレート
○年○組
在籍○人
学級○人
支援○人
欠席○人
避難完了しました。
(◎◎◎がいません。)

最初のテンプレート



人数報告テンプレート
○年○組
在籍 ○人
避難児童 ○人
欠席 ○人
避難完了しました。
(◎◎◎がいません。)

現在のテンプレート



教室の避難用探検バック



職員室外の避難用探検バック



体育倉庫の避難用探検バック

(4)登下校について(自転車通学)「安全な自転車通学の見える化」

本校は、小学校では珍しく自転車通学を行っている学校である。学区は広く遠い児童は学校から自宅までの距離が4kmを超える。また、平成29年に隣の洗心小学校校との統合を行った結果、それまで以上に学区は広がり、最も遠い児童は7kmを超える。そのため、登下校の方法も、徒歩・車で送迎・自転車通学・スクールバス(2系統)・路線バス・校内にある学童保育・地域にある学童保育・民間の学童保育のように多様である。

登下校の詳細は下表の通りである。

富里南小学校下校方法調べ

単位：人

	徒歩	送迎(車)	自転車	スクールバス	路線バス	洗心バス	学童	葉山キッズ	民間の学童	全校児童
令和5年度	78	73	104	39	43	18	40	33	2	406
令和6年度	57	73	88	48	47	15	38	25	1	393

※洗心バスとは、統合した学校の児童用スクールバスである。

※親の都合による複数回答を等を含むため、合計数と全校児童数は一致しない。

自転車通学に関しては、4年生以上の希望者が行っているが学区の道は狭く、歩道の整備もされていないところがほとんどであるにもかかわらず、成田空港が近いので、交通量は多く狭い道を大型のトラックが走っている現状がある。

このような環境での登下校であるため、交通事故のリスクは高い。また、下校時は、徒歩下校と自転車通学の児童が一斉に帰っていたため、児童同士の接触事故も多かった。

そこで、事故防止と事故対応を考え、見える化を図った。

①時差下校の導入「安全な下校の見える化」

バス通学もあるため以前から児童の下校時刻は決められていたが、通学方法別に学校全体で教室を出る時刻を決め、学級ごとの下校時刻のずれをなくした。

まず自転車通学・車による迎え・学童(校内)の児童が下校し、5分後に徒歩通学の児童が下校する。その後、バス通学の児童がバスの時間に



時差下校時の自転車の様子

合わせ教室を出る。

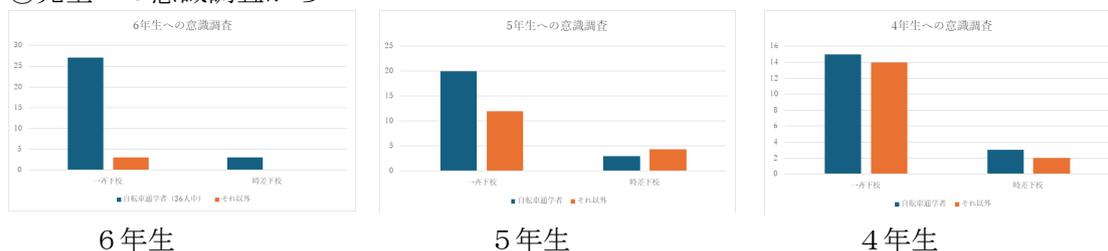
たった5分ではあるが、一斉に自転車が先の下校するため、徒歩通学の児童の間を縫って走る自転車がなくなった。結果、昨年度及び本年度(現在まで)自転車と徒歩児童との接触事故はほぼなくなった。

(昨年度中学生との軽い接触事故が1件。時差下校とは無関係)



時差下校時の徒歩下校児童の様子

②児童への意識調査から



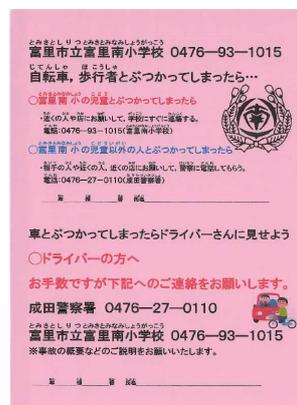
児童の一斉下校を行う時と時差下校を行う時の状況についての調査を行った。
 [2本のバーの左側(青色)が自転車通学者、右側(茶色)が徒歩通学者である。]
 グラフの左側二本は「一斉下校を行ったときに危険を感じたことがありますか。」という問いに対して「ある」と回答したものであり50%前後の児童が危険を感じていた。右側二本は「時差下校の時に危険を感じたことがありますか。」という問いに対して「ある」と回答したものであり、どの学年も5%程度と非常に少なくなったことがわかる。

また、「時差下校を行うことで安全に下校できると思いますか。」の問いには、どの学年もほぼ全ての児童が、「思う」と回答している。

③事故の際につかう「連絡お願いカード」の携帯および活用「事故対応の見える化」

登下校中、万が一接触事故を起こしたときに活用する「連絡お願いカード」を全児童のランドセルに入れ携帯させた。

軽い接触事故の場合、事故を起こしたドライバーが相手が子供であることをいいことに、正しい事故対応(警察に連絡等)をせず立ち去るケースがあったため、車や自転車と事故を起こしたときや、自分が誰かにぶつかった時なども、このカードを見せて正しい事故対応・処理を行ってもらうためのものである。



連絡お願いカード

④自転車点検「安全な自転車の見える化」

安全な自転車通学を行うためには、ルールを守ることだけでなく整備された安全な自転車に乗ることも大切である。本校では、毎月末に自転車点検を行い、安全な自転車に乗っているかを確認している。このことで、安全な自転車に対する理解ができています。



月末に行われる自転車点検

6 成果と課題

(1)成果

①危機管理マニュアルの見える化

- ・「学校安全の手引」等に沿って作成することで、一目でわかるマニュアルができた。
- ・若年層研修の一環としてマニュアルの作成を行った結果、経験の少ない若年層が事故・災害等の基本的な対応が理解でき、自信をもって対応できるようになった。
- ・危機管理マニュアルをカード化したことで、緊急時に使えるマニュアルになった。

②対応の見える化及び情報の共有と迅速な対応

- ・ホワイトシートを使用して時系列で整理して記録することで、対応の不備や遅れがなくなった。
- ・警察・消防・市教委への連絡の際に正確な情報を報告することができるようになった。
- ・職員の動きが把握できるため、他の職員への指示が的確にできるようになった。
- ・事案への対応の状況が共有できるため、職員間の協力体制が自然にとれるようになった。

③避難訓練での見える化

- ・避難の動線・人数報告用テンプレートなどの工夫により2次避難にかかる時間が短縮できた。
- ・実際の人数確認の時間では、テンプレートを作る前と比べると5分程度かかっていたものが3分に、テンプレートの改良によって2分30秒に短縮された。

④「安全な自転車通学の見える化」

- ・自転車通学と徒歩通学の下校時刻をずらすことで、自転車が歩いている児童を追い越すために横をすり抜けることがなくなったため、接触事故がなくなった。
- ・「連絡お願いカード」を携帯し提示することで、正しい事故対応を行ってもらえる。また、カードの説明をすることで、児童の事故を起こすことは大変なことであることを意識するようになった。
- ・自転車の安全点検を行うことで、児童がタイヤの空気圧やブレーキの効きなどを気にするようになった。

上記のように、『見える化』進めたことで、教師の対応が迅速かつ的確になった。
また、児童も同様に安全に対する意識が高まってきたことがわかる。

(2)課題

①危機管理マニュアル作成時のフィードバック方法

- ・危機管理マニュアルについてはこれからも、若年層研修その他の研修を使い全職員の手で形式や内容の見直しや統一を図ることで、職員へのフィードバックを図っていききたい。

②事故・災害等への対応の見える化及び情報の共有と迅速な対応

- ・ホワイトシートによる情報の共有は有効であるが、職員室へ行かなければ情報が共有できないという問題点がある。学級で指導中の職員はリアルタイムで共有することはできない。今後リアルタイムで共有する必要がある情報については、タブレットなどのIT機器の活用なども考えていく必要があと考える。

③避難訓練での見える化

- ・今後の避難訓練で、いろいろな避難経路(動線)設定することで、どのような避難経路を通っても素早く整列できるように訓練をしていきたい。
- ・支援学級児童と一緒に避難するため、今後も「人数報告用テンプレート」の改良は考えていかなければならない。